

れたる、花もの云わねど思召しの有難さは、その香りを通して拝察されたのであった。

君は学者と云うよりは、其の風貌、その言語に、早くより老成な長者の風を示した。信頼すべき先輩、依存すべき識者として学界からも、社会からも、高く仰がれた第一人者であったが、惜しいかな天寿を假さず、ままにならぬ世の中である。誰が今後の児童保育の領域に、真に理解あり滋味ある指導を倉橋さんのように与えてくれられるであろうかは、非常に痛心すべき問題であるが、在天の君の霊も、亦一日も早く斯の人を社会に薦められん事に力を添えられん事を祈るのである。

(童話家)

倉橋先生と「幼稚園」

坂元彦太郎

倉橋先生と私との直接のつながりは、終戦の翌年三月私が

文部省の役人になって初等教育と関係するようになってからのことであった。まだ私が席に馴れないある日、フ拉里と、「わたしは倉橋だ」と名のつて立ち寄って下さったのはじめだった。その後、先生が文部省に來られる度ごとに、ことに教育刷新委員会が開かれ先生がそのメンバーになられてからはその会合の前後に、きっと私の席の前の革椅子に姿を見せられた。ときには、夜おそくまで、火の氣のない文部省の一室で、あれこれと、いろいろな話がつもった。幼児の教育に関してばかりでなく、その外に全く指導してもらったり、相談する相手がなかった私は、倉橋先生からお話をきいたりこちらから話をしたりすることは、仕事の上でたいへんやくだったばかりでなく、気持ちの上で大きなはげみとなった。

私は三十才を過ぎてから小兒まひをわずらったが、先生は五十才を越えてからは、しにかかられたという。お互の生れついた小兒病性を心から笑いあったこともあったが、一ばん先生をたよりしたのは、やはり学校教育法を起草する場合に幼稚園の位置をどうするか、という問題についてであった。

学校教育法の起草にあたって、はじめのうちは、幼稚園を正規の教育機関と認めて学校の種類と規定することについて相当の反対意見が省内にもあった。省議の席上、法律顧問(?)として文部省に關係をもっていた東大のT博士がはつきりと反対意見を述べられたくらいであった。また、幼稚園

は、ごく少数者のためのせいたくな施設だ、といった意見の人も多かった。

そこで、そして「国民学校」の名を小学校に変え、中学校高等学校というように名前をそろえることも関連し、さらに「保育園」の問題とも考え合せて、「幼稚園」という名称を交えることによって、一般的な大衆的な教育機関であることをはっきりさせることも、一案として私は頭でいつも考えていた。

ある夜、私は倉橋先生につぎのようなことをたずねた。

「先生、幼稚園という名前を、幼児園なり、幼児学校なり、何か適当なものに変えるてはないものでしょうか」

このとき、先生は、いつもとはちがって、すぐ答えをしようとはなさらなかった。しばらくしてから、熱のこもった低い調子でいわれたことばが私には忘れられないものとなった。

「いろいろ考えてくれるのはありがたいが、われわれ明治以来、幼児の教育に献身してきたものにとっては、幼稚園ということばの中に、幼児への愛情と幼児教育の伝統とが結晶したのになっている。幼稚園という名前は絶対に変えないでいてほしい」

私は、このとき以来、はっきりと覚悟がきまった。どこまでも、幼稚園としての先人の積み重ねた伝統を生かしながら

正規の教育機関としての位置を確定しようと努力する決意ができた。

この少しあとのことであつた。先生が、教育刷新委員会の席上で、六・三制の実施と関連して将来幼児教育の義務制も実施することを主張された。先生の席は右側で、説きおえられて、ポクッと大きな座席に幼児のようにはまりこむように坐られたことを昨日のように覚えていいる。先生の提案は、周知の通り、刷新委員会の決議の中にはいっているが、先生は幼稚園の義務制がそう簡単に実施できるものと思っておられたわけではなかった。先生の幼児教育への熱意は、あの会ではこういう形でしか表現できないものであつたし、さらに、私が想像したのは、幼稚園を学校教育法の一章を占めることを促進する援護射撃でもあつたのだ。

「幼稚園」と倉橋先生という題をかかげることは、むしろ馬鹿げたことだと、読者は思われただろう。幸にして幼稚園が学校教育の一環としてますますその基礎を固めるようになっていいる現在、終戦直後の混乱期の中におこつた、この一つのエピソードを、ここにつけ加えることは、決して意味のないことではないであらう。

師と仰ぎ、そしてほんとに可愛がって下さつた先生の御他界の報を受けて、私の背骨から力が抜けたような気がする。外にもいくつかの思出があるが、あの夜の先生のまなざしと

語調にみなぎった、幼児への愛情と幼稚園への熱意とは、いつまでも私をばげましむちうつものとして、残るであろう。

(岡山大学教育学部長)

倉橋さんを憶う

下村 壽一

確か昨年の春頃であつたと思うが、ゆくりなく浅草の地下鉄の中で倉橋さんにお目に懸つた。久し振で観音様に詣り、戦後の浅草の風物を瞥見して面白かつたと語られ、四方山の話をお別れした。健康も充分回復され、悠々自適して居られる模様を見て安堵もし嬉しくも思つた。その後研究も執筆も続けられ、最近では「子供讃歌」を編述され一本御寄贈に預つたが、今となつてはこの本は、倉橋さんが若い学生頃から子供の問題に取組んで一生苦勞をされた記念塔となつて仕舞つたのは悲しいことである。倉橋さんは円融無礙

懇切周到・機智縦横・八面玲瓏最も洗練された紳士の好典型であつた。教育者として傑出し、殊に児童保育の問題に付ての最高權威であつたことは今更申述べるまでもない。昭和四年文部省に始めて社会教育局が設けられ、社会教育官の新官制の出来たときに、私は無理にお願して兼任社会教育官になつていただき、新らしい社会教育の建設に対して色々と御骨折を願つたが、該博な識見と豊かな体験に基いて、何時も建議し示唆を与えて呉れたことを今も猶頗多としている。其後昭和十年東京女高師に職を奉ずることとなつたが、在職期間の大半は支那事変に続く大戦争で、誠に多事多難をきわめた。此の間倉橋さんは幹部教授中の重立つ一人として、学校の管理運営・生徒の教育指導万般に互つて悉く参劃し、実際に行届いた世話をされ、真に己を忘れて学校の為に尽された功績は言葉には尽し難いものがあつた。私は倉橋さんから助けられたり、教益を蒙むるのみであつたことを追憶し、今となつては唯々御冥福を祈るのみであることを悲しく思うのである。

(元お茶の水女子大学長)

×

×

×